

近藤みゆき先生に捧げる

宇田川 夏 美

近藤みゆき先生と出会ったのは、「上代中古文学演習」という講義を履修した時でした。先生はいつもにこやかにご挨拶されながら、優雅に教室に入られていました。そして、いつお会いしても素敵なお洋服をお召しになっておられました。

この講義で最初にグループ発表をすることになり、慌てて研究室に相談に訪れた私と友人達に対し、先生はご多忙にも関わらず、嫌なお顔一つせず応じて下さいました。私は先生の親身なご指導を受けたことで、いつしか発表ということはあまり関係なしに発表の準備に没頭してしまいました。無事に発表を終え、先生が「久しぶりに素晴らしい発表を聞きました」とご自身のことのように喜んで下さった時のことを、私は昨日のことのように思い出します。こ

うして私は「引き続き近藤先生のご指導を受けたい、私が卒業論文で書けるものはこれしかない」と思い、迷わず近藤ゼミ生となりました。先生は喜んで下さると共に、「発表でたまたま担当しただけなのに」と驚かれましたが、こうして今改めて思い返すと、近藤先生の親身なご指導がなければ、私は卒業論文を書き上げることはできなかつたと、心から思います。

講義では活発に話し合いが行われ、発言を多く求められました。先生は一人一人の発言を熱心にお聞きになったり、気になった発言を深掘りするなどのことをされていて、先生と受講生が一体となって作り上げていく講義で毎日が新鮮でした。また、先生は毎回の講義で、発表直後にフィードバックをされていました。先生は「一番知りたいことが

考察できていない」「何を伝えたいのかがよくわからない」「パソコンの使い方を勉強した方がよい」など、ばつさりとやや辛口な評価を受講生にされており、他の受講生に對しての評価でも、こんなにも「細やかで的確な評価」を頂けることは貴重なことだと感じました。しかし、あまりにもはつきり仰るので、時折笑いが起き、その度に先生は「何で笑うの?」とでも言いたげなお顔をされていました。私は、先生がこの講義で時折見せて下さる、そんなお茶目な一面が好きでした。

前期終了時だったと思いますが、ある時、先生は私に、「グループ発表の準備、ほとんどあなた一人でやって大変だったでしょう?」と仰いました。この話を私からしたこととは全くなかったのですが、先生は発表の様子から見抜かれていたようです。確かに、大変だったのは事実ですが、同時に楽しくもあったので私はあまり気にしていませんでした。しかし、先生はすぐにご心配下さいました。こんなにも一人一人の学生のことをよく見ておられ、気にかけて下さる先生がいらっしゃるといことがとてもありがたく、そして心強く感じました。

四年生になってからは、「特殊演習」の授業で一人ずつ発表を行い、先生の一人一人へのご指導もますます熱が入

りました。私は卒業論文に関するご相談はもちろんのこと、近藤先生にお会いしたい気持ちの方が大きく、よく近藤先生の研究室を訪れては、色々な雑談をさせて頂きました。この大学では友人を作れる機会が少ないだとか、最近見た夢の話だとか、色々なお話をさせて頂き、とても楽しかったのを覚えています。中でも、友人の話をした際に、「何でそんな人と友達になったの?」と先生が真顔で仰った時は、「先生、相変わらずばつさり!」と思い、本当に可笑しくて笑ってしまいました。そして私が「何で友達になったんですかね?」と言って二人で笑い合いましたね。先生とは話の波長が合い、性格も少し似ていたのだと思います。ある時、先生は不意に私に、「他のゼミと違って合宿もなく、懇親会にも私は参加することはできないけれど、みんなどう思っているのかしら?」と不安そうなお顔で仰いました。私は全く問題ないことをお伝えしたのですが、先生のお顔はやや曇っていました。今思うと、ご自身のご体調の関係で、ゼミ生との交流が思い通りにできないと、先生は気にされていたのかもしれない。しかし、私は近藤先生以上に学生のことをよく見ておられ、そして、学生との交流を大切にして下さる先生を知りません。講義のグループでの話し合いの時は、話し合いの進み具合だけでなく、その学生の近況なども聞かれていました。また、ご相

談する度に「遠慮なく何でも話して」と仰り、的確なアドバイスを下さり、悩んでいたことが嘘のように解決し、霧が晴れたような晴れやかな気分になりました。先生は笑いながら「大袈裟じゃない？」と仰るかもしれませんが、これは本当に不思議な感覚で、先生がじっくりと話を聞き、向き合って下さるからこそ味わえる感覚なのだと思います。そして、学生のためを思っていらいっしょだったからこそ、やや辛口なこともばつさりと仰っておられたのだと思います。合宿がないなんてそんなことはどうでもよく、私達はそんな先生のゼミ生であるということを、心の底から誇りに思っておりました。先生のご参加が叶わず、本当に残念ではありましたが、懇親会は実質ほぼ無料で開催でき、ゼミ生同士の仲も深まりました。

今振り返ると、私が助手になるうと思っただのは、近藤先生を尊敬していたことが大きく影響しています。近藤先生のお姿を見て、「人と向き合い、信頼される人になりたい」「すぐに手を差し伸べられる人になりたい」という思いを抱きました。近藤先生から学んだことを、近藤先生のように、とはあまりにも恐れ多くて言えませんが、助手として、卒業生として実践したいと思っただけです。採用されたことをご報告した時、近藤先生はご自身のことのように喜んで

下さり、「これからも宜しくお願いしますね」と、笑顔で仰って下さいましたね。学生時代に近藤先生から受けた御恩を、今度は助手として少しずつお返しできたらと思いい、助手としての仕事に励んできましたが、残念ながら、それが叶うことはありませんでした。想像以上に先生は苦しい思いをされ、長きに渡り病と闘ってこられたのだということをお願い知らされ、言葉にならないショックを受けました。しかし、近藤先生から教えて頂いたことは、いつまでも忘れることはありません。私にできることは、それを実践することです。最後のゼミ生としては、ご相談してばかりで、出来が悪い学生であったことは言うまでもありませんが、近藤先生に出会わなければ今の私はなく、近藤先生は私にとって偉大な恩師であることだけは誇りを持って言えます。学びだけでなく、本当に多くのことを教わり、私にとって近藤先生は人生の師でもありました。

闘病されているということに忘れそうになってしまいうほど、ご自分のことは後回しで、いつも学生に向き合っておられた近藤先生。いつお会いしても華があり、素敵なお洋服をお召しになつておられた近藤先生。そして、そのお人柄で多くの方々から慕われていた近藤先生。本当にありがとうございます。最後まで私達に向き合って下さっ

た近藤先生に心から御礼申し上げます。どうか安らかにお
休み下さい。謹んで哀悼の意を表します。

(うだがわ なつみ・平成30年度卒業生)